

# 農業試験場、農業試験場暖地園芸センター成果発表課題 要約

## 1. ‘まりひめ’ 環境制御時の効率的な養水分管理

(農業試験場栽培部 主任研究員 小川大輔)

環境制御下の高設栽培において、イチゴ‘まりひめ’は日射量に応じて株当たり 40~300mL/日程度の給液を必要とし、養水分吸収量に基づき設定した日射比例式給液+定時給液を行うと、日射量の多い時期の収量が従来のタイマー制御給液より増加する。

## 2. 夏季高温に対応するイチゴ‘まりひめ’栄養状態管理

(農業試験場栽培部 主査研究員 田中寿弥)

夏季の高温による開花の遅れを軽減するため、‘まりひめ’の適正な栄養状態管理手法を検討した。7月下旬以降に採苗した小苗の利用を避け、定植の2週間前頃に窒素中断をすることで、開花の遅れを軽減できる。また、定植後の培養液濃度が高いと分化苗の開花が早まり、反対に、培養液濃度が低いと未分化苗の開花が早まる。

## 3. ショウガ栽培に適した新肥料の開発と施肥方法の確立

(農業試験場環境部 主任研究員 橋本真穂)

ショウガ栽培で使用されている樹脂被覆肥料に替わる肥料について検討したところ、ハイパー-CDU長期と有機質資材を配合した試作肥料のうち窒素有機率の低い配合案がショウガの養分吸収特性に適していた。しかし収穫適期まで肥効が継続せず、基肥に用いると新ショウガの重量は樹脂被覆肥料にやや劣るため、施用方法の検討が必要である。

## 4. イチゴ‘まりひめ’の炭疽病対策

(農業試験場環境部 主任研究員 菱池政志)

本ぼに定植後の株から得たランナー苗(秋ランナー苗)は炭疽病に感染しているリスクが低い。秋ランナー苗の採苗時期は11月下旬から12月で、展開葉3枚の子株を挿し芽し、親株側のランナーの切り口を水挿しする方法が適する。

## 5. ハウス実エンドウにおける品質不良莢・病害抑制のための温湿度制御技術開発

(農業試験場暖地園芸センター園芸部 副主査研究員 山野智輝)

ハウス実エンドウの現地調査において、R5年は病害、R6年は品質不良莢の発生が多かった。品質不良莢の多発圃場は少発圃場より気温が低く、病害の多発圃場は高湿度かつ10~20°Cの遭遇時間が長かった。それらの対策としては、側窓の開放度を調整することで、日中のハウス内気温の確保と夜間の温度低下が可能であった。